

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23330169

研究課題名(和文) 日本は移民国家か？日本とオーストラリアにおける移住者の市民意識と帰属感の比較研究

研究課題名(英文) Is Japan an Immigrant Country? A Comparative Study of Immigrant Citizenship Consciousness and Belonging in Japan and Australia

研究代表者

FARRER GRACIA (Farrer, Gracia)

早稲田大学・アジア太平洋研究科・教授

研究者番号：70436062

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本における移民と、移民国家であるオーストラリアにおける中国、韓国、ブラジルからの移民またベトナム難民の第1と第2世代の人々が、受け入れ社会に対してどのような市民意識と帰属感を持つかを比較研究することによって、日本社会が「移民国家」となりうるのかを検討することを目的とした。インタビューとアンケート調査を通して、同じ国からの移民が受け入れる環境が異なると、違った市民意識とアイデンティティーが形成されることがわかった。その結果、多様な背景をもつ市民を受け入れる日本側の課題が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research project compares the sense of belonging and citizenship consciousness among the first and second generation Chinese, Brazilian and Vietnamese immigrants in Australia and Japan. Through this exercise, we hope to answer the question whether Japan is on its way to become an immigrant country. Through interviews, survey and media analysis in both countries, this study shows that different receiving contexts have created different levels of citizenship consciousness and different types of identity among immigrants originated from the same countries. This study clarifies issues surrounding immigrant incorporation in Japanese society.

研究分野：社会学

キーワード：国際移動 移民二世 帰属感 移民の市民意識 日本 オーストラリア アイデンティティー 多文化政策

1. 研究開始当初の背景

1980年代から、日本に居住する外国人が急増し、2010年には210万人を超えた。そのうち、半数は永住者と特別永住者が占めているが、定住者、日本人配偶者、永住者の配偶者など日本に新たに移住し長期滞在している外国人も多い。これらの移住者は1億3千万人の日本総人口のなかでは、まだ小さな存在だが、少子高齢化に直面している日本社会には、これらの移住者がどのように日本社会に組み込まれるのかは社会安定に重要な課題になっている。特に、過去30年間に於いて、日本に生まれ育った二世という移住者の子どもも成長した。彼らが日本社会とどのような関係を持っていて、日本社会に対して帰属意識があるかどうかは日本の民主政治または社会発展に大きく影響すると考えられる。

これまで日本における外国人移住者についての研究は盛んに行われてきた。ただし、その場合、国の「移民政策」や移住者の経済活動に焦点を当てる研究が多く、移住者の市民意識と帰属意識についての研究は中国人留学生や日系ブラジル人のアイデンティティの研究などわずかであった。また、ほとんどの研究が同じ国の出身者に集中する傾向があり、異なる国籍の移住者の間、一世と二世の間、また移住者の歴史と政策が異なる受け入れ国を含めた比較研究はなかった。

2. 研究の目的

本研究は、日本の外国人居住者を移民と捉え、日本における移民と、移民国家であるオーストラリアにおける中国、韓国、ブラジルからの移民またベトナム難民の第1と第2世代の人々が、受け入れ社会に対してどのような市民意識と帰属意識を持つかを比較研究することによって、日本社会が「移民国家」となりうるのかを検討することを目的とした。とりわけ受け入れ国の移民政策、国民国家についての言説(National Narratives)、移住経験、また、ホスト社会での経済的な役割と実践がそれぞれどのようなプロセスで、どれほど移民たちの市民意識(シティズンシップ)と帰属意識に影響を及ぼすかを解明することをめざした。

主に以下の研究テーマについて調査を行った。1)市民意識また帰属意識についての定義と語り; 2)受け入れ社会についての言説(National Narratives)、移住者のホスト社会での経験、あるいは、その社会での経済的な役割が市民意識と帰属意識へ与える影響; 3)市民意識と帰属意識についての世代的な変化; 4)多様な帰属意識を生じさせる要因とプロセス。

3. 研究の方法

主として質的研究を行った。現地の状況に合わせて、それぞれの移民グループを対象として、聞き取り調査、参与観察、メディア研究などの手段を通して、データの収集、分析をした。オーストラリアにおける中国系移民の場合、アンケート調査も行った。具体的に、以下の研究を行った。

(1) 日本における調査

東京にある中国人の子どもたちが通う週末の中国語学校で、親が集まっている待合室で3年間参与観察を行った。子どもに対する親の話しを聞き、また親子のやり取りなどを記録した。

日系ブラジル人のエスニックスクールおよび教育フォーラムなどに参加し、参与観察を行った。

リサーチ・アシスタントの協力で、主に関東地方で聞き取り調査をした。中国系移住者140名(うち12歳前に移住した1.5世と呼ばれる移民の子どもたちおよび日本で生まれた2世が総計40名)、韓国系移住者40名(うち二世5名)と日系ブラジル人10名にインタビューを行った。

関東および関西に居住する、「ベトナム難民」として来日した親を持つ子どもたち、12名にインタビューを行った。

(2) オーストラリアにおける調査

中国系移民

2012年2-3月、8月に2回オーストラリアのシドニーとメルボルンに行き、現地調査を行った。メルボルン都市部にある中国語補習学校をベースとして、質問紙調査と聞き取り調査を行った。質問紙調査は210人子どもたちから協力を得て、聞き取り調査は親を含めて50人から協力を得た。

ブラジル系移民

オーストラリアには70年代にブラジルから移住した「オールドタイマー」と、90年代以降に移住した「ニューカマー」という2つのグループが存在している。本研究では、ニューカマーへのインタビュー調査を中心に、複数のブラジル系メディア関係者へのインタビュー調査も行った。

ベトナム移民

シドニーで「ベトナム難民」の子どもたちの世代へのインタビュー調査を実施した。

日本とオーストラリアにおける移民のうち、中国系、韓国系、ブラジル系、ベトナム系移民のそれぞれの一世代、二世が完璧な対照となっていないが、得たデータにより、移民の帰属意識の共通点、第1世代と第2世代の間の差異、または、異なる移民政策と社会環境、国民国家についての言説および移民経験など一連のメカニズムが移民たちの帰属意識、市民意識およびアイデンティティにどのような影響を与えているのかは明らかになった。

4. 研究成果

(1) 移民第一世代の帰属感について：ソジョナーのメンタリティー (sojourner mentality) とローカルな帰属感

大人になってから国際移動した第1世代の移民は、出身国に関わらず、受け入れ国への市民意識が薄い。日本では、ソジョナーのメンタリティーが強く感じられた。なお、日本とオーストラリアに住んでいる移住者は共にローカルな帰属感があったが、受け入れ社会の環境の差異で、「ローカル」についての理解が異なっていた。

ソジョナーのメンタリティー (sojourner mentality)

日本における中国人、韓国人第一世代はソジョナーのメンタリティーを示した。即ち、ほとんどの1世が、日本への移住をあくまで一時的な滞在として認識している。本研究の対象者は留学や、就職や、日本人との国際結婚などの理由で移住し、平均10年以上日本で生活していた。長期滞在の身分を持ち、安定な生活をしてきたものの、子どもが自立出来たら、または定年後に、自分の老後を出身国で過ごす意欲を示した。

その理由の一つは、国民国家に関する言説が移住者達と受け入れ社会との関係を規定し、様々な移住経験を解釈する道具として使われる。例えば、移民の中で、日本は島国根性があるから、基本的に排外的な社会であり、外国人をあまり好まないという言説がある。差別経験の有無に関わらず、中国および韓国からの移民に対して日本は移民のキャリアを発展させ、経済的な利益を与えた国だが、寛容な移民社会でもなく、移民は日本が自分の国にならないという考えが強いからである。一方、中国と韓国にも、家族および自民族に関する言説があり、例えば、中国人の中に「落葉帰根」という言い方が頻繁に聞かれた。

二つ目の理由は、社会関係と文化適応である。韓国系および中国系対象者の中には、留学または日系企業の経験を経て、流暢な日本語を話し、日本文化を深く理解している人が少なくない。しかし、日本での社会生活で、出身国で培われた習慣が通用出来なくなり、拘束されている感覚が常にあるという。このような拘束感が自国に戻って、発散する意欲を高めた。

従って、中国人および韓国人ニューカマーは、帰化より永住権を求めていた。さらに、韓国人の中で、永住権を取ることに抵抗する人も見られた。中国人の第一世代の移民の中には、中国で住居を購入し、社会保険を払っている人もいた。

しかし、母国で老後を楽しむことが出来るかどうかは別の懸念である。長年海外に暮らし、日本社会に適応して、母国に戻ったら、不慣れなことが多くなった。とりわけ、年を取ると、生活基盤が日本に築かれ、母国には親がいなくなり、遠い親戚しかいなくなるため、帰国がただの夢になる可能性が高い。言い換えると、日本で長く住めば住むほど、母国に戻れなくなる。

日本におけるブラジル系移民の場合も、ソジョナーのメンタリティーが強く感じた。しかし、そのメンタリティーの形成要因が中国・韓国からの移民と異なっている。日本にいるブラジル系コミュニティのほとんどは日系または日系人の家族で、定住者の身分で工場の働き手として入国した。彼らが、ブラジルに住んでいるとき、「ミドルクラス」の社会階層において、高校以上の教育を受けた。しかし、日本に移住した時点で出稼ぎ労働者になり、「downclass」(下の社会階層へ移る)を経験した。さらに、ブラジルでは、日本人としてのアイデンティティを誇ったが、日本に入ったら、日本にいる日本人との距離を感じて、文化の差異を見いだしたうえ、ブラジル人のアイデンティティを強調することになった。

その結果、日本は、ただのお金を稼ぐ場所で、いつか帰国することになるという考えを強く持っていた。

従って、日本におけるブラジル移民が半分以上は永住者で、帰化者がほとんどいなかった。子どもの教育に対しても、ポルトガル語で教えるエスニックスクールが多く開かれ、ブラジルで高等教育を受ける準備をさせていた。

しかし、中国人と韓国人と同様に、ブラジルに帰られるかどうか疑問である。特に、ブラジル移民の場合、長期的に工場労働に従事して、「de-skill」(スキルがなくなる)の現象が顕著に見られ、ブラジルに一旦帰っても再び日本に戻ることが多かった。

ローカルな帰属感

日本でも、オーストラリアでも、第一世代の移民達は社会への帰属感があるとしても、ローカルな帰属感に過ぎない。日本における中国系と韓国系ニューカマーたちは、「コミュニティ」より、家族、教会、および住んでいる地域等への帰属感があると言われた。

このローカルな帰属感は感情的に母国から離れているが、受入国に対してはまだ形成されていないというふうに捉えてもいい。ここで、オーストラリアのブラジル系コミュニティの例が興味深い。研究協力者であるCristina Rochaによれば、「インタビューした人々の多くは、オーストラリアにもブラジルにも帰属するとは思えなくなり、自分が帰

属するのは“オーストラリアのブラジルコミュニティ”だと感じている」という。ところが、研究協力者のCristina Wulforthによれば、「オーストラリアには一つではなく二つのブラジル人コミュニティが存在する」と言う。オーストラリアでは、70年代の「移民第一次ブーム」の時期に移住した「オールドタイマー」の人々と、90年代以降の「第2次ブーム」の時期に移住した「ニューカマー」の人々との間で、同じ「コミュニティ」に帰属していないという意識が広がっていることである。オーストラリアの「ブラジル移民コミュニティ」が具体的に何を意味するかは自明のことではなく、人によって異なることが、研究をとおして再確認できた。

(2)1.5世代と第2世代の帰属感と文化継承について

受け入れ社会としての日本とオーストラリアの間の相違が、若い世代のアイデンティティ、帰属感、または、文化継承に顕著に現れた。

中国人の若者世代：

日本で育った中国からの移民の子どもたちは、日本語を母語として話す。また友だちも、中国人より日本人のほうが多い。十代になってはじめて子どもたちは、法律上中国籍を持つことに気づくのだ。ただ、両親の努力と中国への定期的な里帰りによって、子どもたちは十分な中国語のスキルをある程度維持している。いじめや孤立を避けるため、子どものうちは日本人として暮らすひとびとも、成長するにつれて自らのルーツとしての中国文化に自信を持つようになる。

けれども、かれらは分類されることを拒む。「自分を何人だと思っていますか」という質問に対して、中国からの移民の子どもで二重文化を生きる彼らは、答えに窮するようだった。「中国人」も「日本人」も、かれらのアイデンティティを表すにはしっくりこない。最終的には、「国際人」「世界人」をアイデンティティとする調査協力者もいた。つまり、コスモポリタンのアイデンティティを持つようになった。

オーストラリアでの研究は、メルボルンにある中国語学校をベースとして行った。オーストラリアの多文化政策のもとに、国による言語教育政策があるため、中国語学校がオーストラリア政府の支援をもらっていた。そして、中国語の習得が大学に進学する際に有利になると認識されていた。そのように、親の「母語保障」の思いは、子が移住社会における「位置取り」に効果を持つ第二言語学習という形で、中国語の継承が実現されていた。

中国系移住者にとって、中国語学校はお互いに支えあう場となり、オーストラリア社会に順調に適應していくための重要な役割を持って

いる。結果として、エスニック・コミュニティの拡大に寄与している。さらに、エスニック・アイデンティティが形成されていることと共に、オーストラリアの市民としての意識も強くなり、中国系オーストラリアンのアイデンティティを持つようになった。

ブラジル系の若者世代

日本およびオーストラリアにおけるブラジル系若い世代の帰属感の差異が教育に対する態度で見いだせる。日系ブラジル移民の中では帰国を目標として設定している人々が多い。ブラジル系の子どもの中には、言語の問題で、不登校や、進学できないなどの問題が発生しつつあったが、解決方法として、ポルトガル語で教えるエスニック学校が多数設立され、ブラジルで高等教育を受けることを目指す動きがあった。

愛知県名古屋市で2014年に開催された「日本ブラジル教育フォーラム」で参与観察を行った時にも、このような傾向が見られた。フォーラムの主催者や学校関係者が懸命に「継承語としてのポルトガル語」を第二世代に教えることの重要性について力説していた。

しかし、研究でわかったのは、日本におけるブラジル人は、工場で働くことが多く、雇用状態も不安定で、エスニック教育へのリソースの投入が限られていた。その結果、エスニック学校を出た子どもは、ブラジルの大学への進学が難しい一方、日本で受験することも無理になった。

それに対して、オーストラリアの場合、そもそもニューカマーのブラジル人の間で「子どもの教育問題」は問題として挙がらない。「継承語としてのポルトガル語」はオールドタイマーの間では話題にはなるが、移住先の公用語であり国際語でもある英語を子どもに学習させることに迷いを示す人々は皆無に等しい。ニューカマーの場合も、大多数が熱心に英語の学習に努めており、日本に在住したブラジル人のように公用語（日本語）を学習することに対するためらいはない。

「ベトナム難民」の子ども

親が「ベトナム難民」であったという点は同じでも、生まれ育った場所が日本とオーストラリアと異なると、違った市民意識と帰属感があることがわかった。日本の場合、親が「ベトナム難民」の場合、子どもたちは「無国籍」となる。そのため、「難民」として来日した親を持ち、日本で生まれ育った子どもたちは、日本人の子どもとなんら変わらず学校生活を送っていても、自らの出自とそれによる「無国籍」の現実に直面したときに、自らの生き方や自己表象を含めたアイデンティティの再構築を経験することになる。ただし、今回の調査でわかるのは、これらの子どもたちはこれらの現実に主体的に、かつ戦略的に

対応していることである。一方、オーストラリアに「難民」として入国した親を持つ子どもたちは、日本の場合と異なり、「無国籍」扱いはされず、ほぼ自動的にオーストラリアの市民権を取得し、オーストラリアに根差して生活している。

(3) 日本は移民国家になりうるか

日本あるいはオーストラリアにおける移民の第一また第二世代の比較研究から、日本社会が移民国家となりうるのかを検討すると、日本側には移民国家と呼ぶにはまだまだ大きな課題があることがわかった。まとめると、以下の示唆が挙げられる。

オーストラリアのように、エスニック・アイデンティティを支える言語政策や、難民に市民権を与える制度が欠けていることで、移住者を日本社会に組み込むメカニズムが弱くなる。無国籍と市民権の差異は言うまでもないが、エスニック・コミュニティが受け皿として新たに移住した人々をホスト社会に適應させる機能がアメリカでの研究でも検証された。

移動のプロセスと移住経験も移民の帰属感到に影響する。ブラジルからの移住者のうち、日本人の血統を持っている人が多いが、彼らがミドルクラスの社会地位から移動に伴い出稼ぎ労働者になった一方、「母国」とも呼ぶ日本社会に文化的に馴染めないまま、また排除された経験を経て、自国がブラジルだという認識が強くなった。子どもにポルトガル語の継承を求め、また、子どもの教育問題があるためエスニックスクールに転校する背景にも、このような移住の経験があったからだ。

日本社会についての物語、とりわけ「移民の国ではない日本」などの言説が、移民は自分が受け入れ社会にどのような位置づけられるのか、またその社会とどのような関係をもつことができるのかについての認識に影響を与える。安定した生活をしていて文化適應に問題がない一方、ソジョナーのメンタリティーが強く示された理由はここにある。そして、日本にいる中国人の子どもは、日本文化がしっかり身に付いているものの、日本への帰属感の代わりに「国際人」というアイデンティティを選ぶのも、日本という社会についての理解が[非移民社会]ということに起因するといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

Liu-Farrer, Gracia. (2015) "Citizenship and Belonging Among Newcomer Immigrants in Japan", *Journal of Asia-Pacific Studies* (Waseda

University), pp. 121-142. 査読無

Liu-Farrer, Gracia. (2014) "Acculturation, Belonging, and Citizenship among Newcomer Immigrants in Japan," in *Peace and Culture* (Aoyama Gakuin University), Vol 6, No. 1, pp. 149-156. 2014. 査読無

川上郁雄 (2014) 「「難民」として来日した親を持つ子どもたちの記憶と自己表象 複言語と無国籍の間で」『比較日本文化研究』17号, pp. 48 - 70. 査読無

川上郁雄 (2014) 「ことばとアイデンティティ 複数言語環境で成長する子どもたちの生を考える」宮崎幸江編『日本に住む多文化の子どもと教育 - ことばと文化のはざままで生きる』上智大学出版, pp. 117 - 144. 査読無

イシ アンジェロ (2014) 「在日とは何か ~ ブラジル人の場合」『植民地文化研究 資料と分析』13号、26-33頁。査読無。

Liu-Farrer, Gracia. (2013) "Chinese Newcomers in Japan: Migration Trends, Profiles and the Impact of the 2011 Earthquake," *Asian and Pacific Migration Journal (APMJ)*, 22(2), 231-257. 査読有

[学会発表](計 12 件)

Liu-Farrer, Gracia. "From Sojourners to Cosmopolitans: Chinese Immigrants' Identity and Belonging in Japan," *Program on International Migration*, University of California, Los Angeles, April 3, 2015.

ファーラー グラシア. 「コスモポリタンな帰属感: 日本における中国人 1.5 世代と二世の帰属感に関する調査」、*International Workshop on Japan's New Immigrants: Capturing The Changing Ethno-Scape in a Globalizing Society*. Waseda University, Feb 12-14, 2015

川上郁雄. 「ベトナム難民」として移住した親を持つ若者たちの記憶と自己表象 日豪でのインタビュー調査から」*International Workshop on Japan's New Immigrants: Capturing The Changing Ethno-Scape in a Globalizing Society*. Waseda University, Feb 12-14, 2015

Ishi, Angelo. "A comparative study of Brazilian diasporic media in Japan and in other countries: Preliminary findings." *International Workshop on Japan's New Immigrants: Capturing The Changing Ethno-Scape in a Globalizing Society*. Waseda University, Feb 12-14, 2015

趙衛国. 「母語教育からコミュニティ言語教育へ: メルボルン X 中国語補習学校の事例を中心に」*International Workshop on Japan's New Immigrants: Capturing The Changing Ethno-Scape in a Globalizing Society*. Waseda University, Feb 12-14, 2015

川上郁雄「移動する子ども」の複
言語・複文化そしてアイデンティティを考え
る」AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム
(2014, 8, 30. リュブリャーナ大学)

Liu-Farrer, Gracia. "Understanding the
Gap: Strategic Action and Meaning Making
among Immigrant Newcomers in Japan," *German
Association for Social Science Research on Japan
[VSJF] Conference*, Berlin, Germany, November
22-24, 2013.

趙衛国: 「中国系移住者に関する比
較社会学的研究(2) オーストラリア・メルボ
ルンにおける第二世代調査を中心として」,
日本社会学会, 第 86 回大会, 慶応義塾大学,
2013.10.

Liu-Farrer, Gracia. "Chinese
Newcomers in Japan: Migration Trends,
Community Characteristics and the Impact of the
Great East Japan Earthquake," *International
Convention of Asia Scholars*, Macau, June 24-26th,
2013

Liu-Farrer, Gracia. "Multicultural
Coexistence, Local Belonging and Identification
among Immigrants in Japan." *2013 Jean Monnet
Chair & SSK International
Conference—Multicultural Challenges and
Sustainable Democracy in Europe and Asia*,
Korea University, April 26, 2013.

Liu-Farrer, Gracia. "Searching for
Power on the Margins – Cultural Capital, Social
Capital and Economic Strategies among New
Comer Immigrants in Japan," *Social Inequality in
Japan: A Reassessment, Workshop at the DIJ
(German Institute for Japanese Studies) in Tokyo*,
March 18-19, 2013.

Liu-Farrer, Gracia. "Narratives,
Experiences, and Roles: Understanding Chinese
Immigrants' (Non) Belonging in Japan,"
Council on East Asian Studies, Yale University,
December 4, 2012

〔図書〕(計 3 件)

川上郁雄「難民」 山下晋司編『公
共人類学』、東京大学出版会、2014年、189
- 204 頁。

イシ アンジェロ 「ブラジルから
考えるメディアの「グローバルとローカル」」
小田原敏・ア アンジェロ・イシ編著『マスコミ
ュニケーションの新時代』北樹出版、2014年、
122-136 頁。

Liu-Farrer, Gracia. "Becoming New
Overseas Chinese: Transnational Practices and
Identity Construction among the Chinese
Migrants in Japan" in Plüss, Caroline and Chan
Kwok-bun (eds.) *Living Intersections:
Transnational Migrant Identifications in Asia*,
Dordrecht, NL: Springer, pp. 150-167. 2012.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ファラー グラシア (LIU-FARRER, Gracia)
早稲田大学・アジア太平洋研究科・教授
研究者番号: 70436062

(2) 研究分担者

川上郁雄 (KAWAKAMI, Ikuo)
早稲田大学・日本教育研究科・教授
研究者番号: 30250864

イシ アンジェロ (ISHI, Angelo)

武蔵大学・社会学部・教授
研究者番号: 20386353

田嶋淳子 (TAJIMA, Junko)

法政大学・社会学部・教授
研究者番号: 20255152

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

趙衛国 (ZHAO, Weiguo)
山東師範大学・教育学院・准教授